

9月21日、最初の巡廻診療を行うチボリ町バサグ村に向かう。トラックでハイウェイを1時間位走った後、山の中へ向って更に1時間。突然、村が開ける。急病になった時、搬送が大変だと思う。

ヘルスワーカーのジョジョやリジャが普段使っている薬を見せてもらう。日本でもよく使われている抗生剤、解熱鎮痛剤、去痰剤、胃薬などで驚く。普段、薬を使わない人たちにとって、強すぎると思われるからだ。私が持参した薬は、はるかに体に優しいものだ。また、去痰剤が咳止めに使われている。空咳の多いこの地域の人には向いていない。後でジョジョと相談しよう。

会場の教会に沢山の人が集まっ

てくる。ほとんどが小さい子供を抱いた女性だ。始めにジョジョとリジャが問診をし、名前、年齢、症状などを書き込んだカードを持ってくる。住民は痩せてはいるが、栄養失調は見当たらない。症状は、咳、胃痛、皮膚病、風邪、頭痛、下痢、腹痛、筋肉痛など。咳が一番多い。主に夜や早朝に咳き込むそうで、診察時には咳は無く、喉も発赤など無い。痰も無い。ビラーン語からセブアノ語、さらに英語と通訳するので、どの位続くのか、酷く咳き込むのか、又は軽くコンコンと出る程度なのか、詳しい事が掴めない。咽頭痛は無いし、肺音も正常なので薬はいらないように思う。トリプル通訳は症状の種類、程度、部位を聞くのに不自由する。次回来る時は、最低限のビラーン語を覚えて来たいと思った。問診票に胃潰瘍とか仙痛（胆石とかに使う）とある人たちは、何が根拠なのか戸惑った。胃が痛いと言った人が胃潰瘍になるのか、胃炎とある人もいてその違いが判らない。どちらも胃粘膜修復薬を出す。皮膚病はほとんど掻き壊し傷が感染を起こしたものだ。直りかけているのもあった。下痢は食中毒とも違い、風邪やウイルス性腸炎、体質的なものもあるようだった。軽い下痢止めを処方する。この地域の気候、常食、体質など情報が必要だと感じる。長年の重労働により関節、筋肉が痛い中年、老人。塗り薬を塗り、湿布を当てると‘ほう’という顔をする。申し訳ないが、十分に薬を持ってきていないので、ほんの数日分しか渡せない。日本の老人は恵まれている。貧血の女性が何人かいた。ほとんど妊婦で、もちろん母子手帳や定期検診は無い。出産までにトラブルは無いのだろうか。少女と言っているけどあどけない顔の妊婦が多く（10代）、既に2人位の子供を腕に抱え大変だろう。重症例もある。熱がありぐったりしていて、自力で飲み込むことも出来ず、すぐに入院が必要だと思われた乳児。結核と診断されたがお金が続かず放置している40代の男性。周囲への感染も気になった。病院で腹部の‘ガン’と言われたが、お金が無いので手術出来ないのだという60代の婦人。本当にガンなのかどうかももう少し詳しく聞かないと判らない。初産以来、毎月、定期的に腹痛と嘔吐、下痢、熱があるという女性。血液検査や便培養などしないと正確な診断は出来ない。いずれもジョジョに任せるしかない。小さい時に背骨を折り、歩くたびにゼイゼイというので喘息だといわれた7歳の少年。喘息ではなく運動量の低下による心機能と背椎の変形による肺機能の低下と思われた。体を鍛え



この女性は、一旦食中毒と診断されたが、診療終了後自宅訪問し、更に詳しく問診することで、婦人病の一種とわかった（バサグ村）